

付編5 名古屋市域における弥生時代後期土器と環濠集落の動向

村木 誠

本書で報告した三王山遺跡をはじめとして、三王山遺跡に近い城遺跡、さらに天白川の対岸に位置し、三王山遺跡から見渡す事ができる見晴台遺跡など、名古屋市内には弥生時代後期の環濠集落が多く存在する。見晴台遺跡では、毎年夏に市民参加の発掘調査を行っており、少しずつ集落の実態が明らかになっているが、それ以外の瑞穂、高蔵、城遺跡については不明な事も多く、今後の調査を待たねば評価できない点も多いが、現時点でわかる範囲で名古屋の環濠集落の動向を整理しておきたい。

これらの環濠集落の動向を考えるためには、それに先立って弥生時代後期の土器編年を確立しておく必要がある。遺跡の動向を把握するために必要な細分にはまだまだ不十分ではあるが、瑞穂、見晴台、三王山遺跡などである程度の資料が揃い、見通しくらいは立つようになった。本稿では、まず土器編年を行い、それに基づいて遺跡の動向を考えたいと思う^(註1)。

1 弥生時代後期の土器編年

弥生時代後期と言うとき、その始まりは、高蔵式を中期末としてそれ以降の土器を指す事については異論は少ないだろう。一方、その終りについては、古墳時代の始まりについて議論がわかれる他、後期の後に終末期という区分を設けることもあって、なかなか議論が定まらない。しかし、ここではそうした議論を行う予定はないため、従来名古屋台地で山中式、欠山式と呼んできた土器群^(註2)を後期とする。

中期末の土器群から順に見ていくが、土器の分類は、報告のまとめで行ったものを利用する。

1-1 中期末の土器群

中期末の高蔵式の中でも最新であろうと考えるのは高蔵遺跡14次 SD2、瑞穂遺跡4次 SD11出土である。細かな説明は省略するが、甕は、タタキ目を持つ台付甕である。これは、作業台の上で作られた後、脚台の端部を調整しておらず、潰れた面をなしている。壺では、細頸壺が目立つほか、櫛描の直線文、波状文で飾られた太頸壺があり、後者は後期の土器につながっていく。

1-2 中期末に後続する土器群

中期末に後続する土器群が後期の土器群であると述べたが、その移行期の様相ははっきりしない。赤塚次郎氏は、ここで言う後期初頭に当たる土器として山中遺跡B地点出土品を示し、それ以前についてはほとんど情報がないと述べる^(註3)。そして、従来この移行期の土器の一つとして考えられていた「仮称見晴台式」の土器群^(註4)は、この移行期の土器群ではなく、さらに、山中式初頭の土器は、畿内第V様式初段階まで遡って考えられるという。一方、石黒立人氏は、高蔵式の後、山中式が成立するまでに1ないし2段階を設定し、後期初頭の土器は山中式ではないと述べ、そこに「仮称見晴台式」と言われた資料をあてる^(註5)。高蔵式最新の土器と山中式最古と言われる山中遺跡B地点の資料との間のヒアタスは大きく、ここを何等かの資料で埋めねばならないことは共通しているものの、そこにどんな資料を入れるのか、それは中期末であるのか後期初頭であるのかという点に相違がある。

名古屋台地では、この山中遺跡B地点の土器に対応する山中式の土器は見つかっていないが、高蔵式に後続する土器群が存在する。「仮称見晴台式」の基準である見晴台遺跡RJ溝3出土資料がそれであり、更に高蔵遺跡(1次)D3下層の資料である。

両者とも、高蔵式に見られた壺などの系譜を引く土器が見られる一方、甕にはタタキ目がなく、脚台の端部にもヨコナデがなされ、高蔵式の特徴は失われている。高蔵式の直後に続く事は明らかであるが、これが果たして山中式の初頭に先行するものなのかあるいは平行するものなのかは決め手がない。ただ、こうした土器と特徴を同じくする土器が、朝日遺跡でⅦ期として山中式の前に設定されている事^(註6)を考えると、山中遺跡B地点の資料にいくらかでも先行するのではないかと考えられる。一方で、名古屋台地で中期末の土器がまとまって出土する東郷梅遺跡、中期末に後続する土器群を出土する清水寺遺跡では、これらの土器と共伴してはいないが、山中遺跡B地点出土のものに類似する高杯H 1が出土している^(註7)。東郷梅遺跡の場合、採集資料という事もあって、不明な点が多いが、山中遺跡でこの高杯に共伴しているような他の土器の出土は知られていない。清水寺遺跡でも同様である。この高杯H 1が用いられた時の他の土器は、ここで中期末から後期初頭と呼んでいる土器群である可能性もあるだろう。とすると、これらの土器群は、赤塚氏の言う山中式前期に平行すると考える事もできる。名古屋台地では山中式前期に相当する土器群はほとんどない事もあわせて考えると、ここで後期初頭と呼んでいる土器群がその時期を埋めている可能性を考えなくてはならないだろう。

1-3 後期の土器編年

後期初頭の問題はひとまずおいて、山中式以降の問題に移りたい。

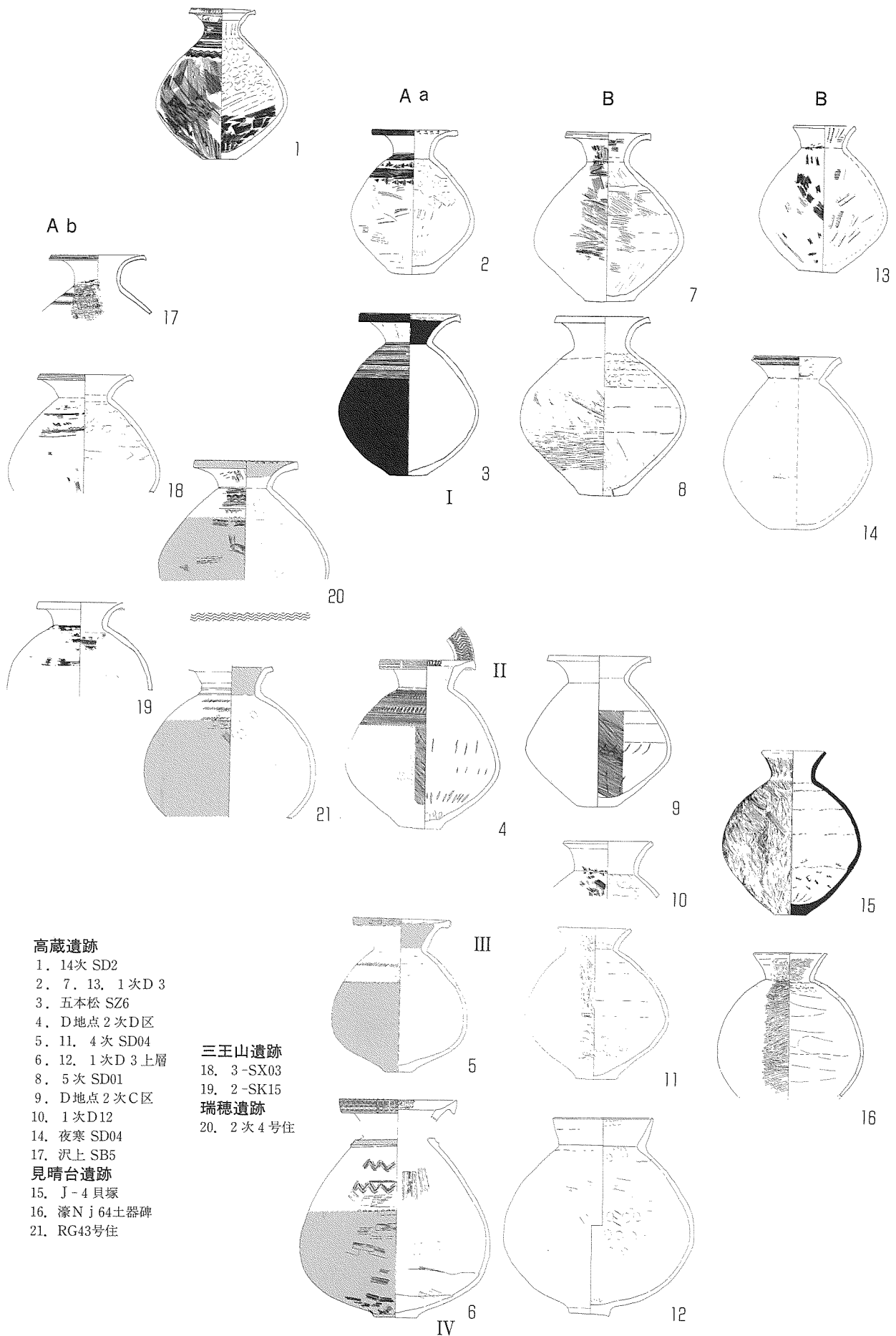
後期の土器編年については、既に述べた赤塚氏や石黒氏らの編年研究があるほか、宮腰健司氏も朝日遺跡の方形周溝墓資料をもとに後期前半山中式の土器の変化について論じている。しかし、これらの詳細な編年を適用する事は難しい。その理由は、一つは先学の対象は尾張低地部が中心であって、これから論じる名古屋台地周辺とは土器に地域差がある可能性が高い事、もう一つは、特に後期前半の山中式は、個々の土器の形態が個性的である上に、一括出土する器種、形式構成も個性的であり、ある資料で組まれた編年に、別の資料を当てはめるとき、その個性と時間差の区別が容易ではない事である。

こうした事情から、名古屋台地独自の編年の確立が急がれる。今回報告した三王山遺跡は、いわゆる名古屋台地の遺跡ではなく、いくらかの地域差を持つ事を報文中で指摘したが、土器様式の構成や個々の土器の変化の方向がまったく異なるという地域差ではないことも既に述べた。まず三王山遺跡で示した4群の編年を基本に、それを名古屋台地の資料などで補うという方法をとりたい。

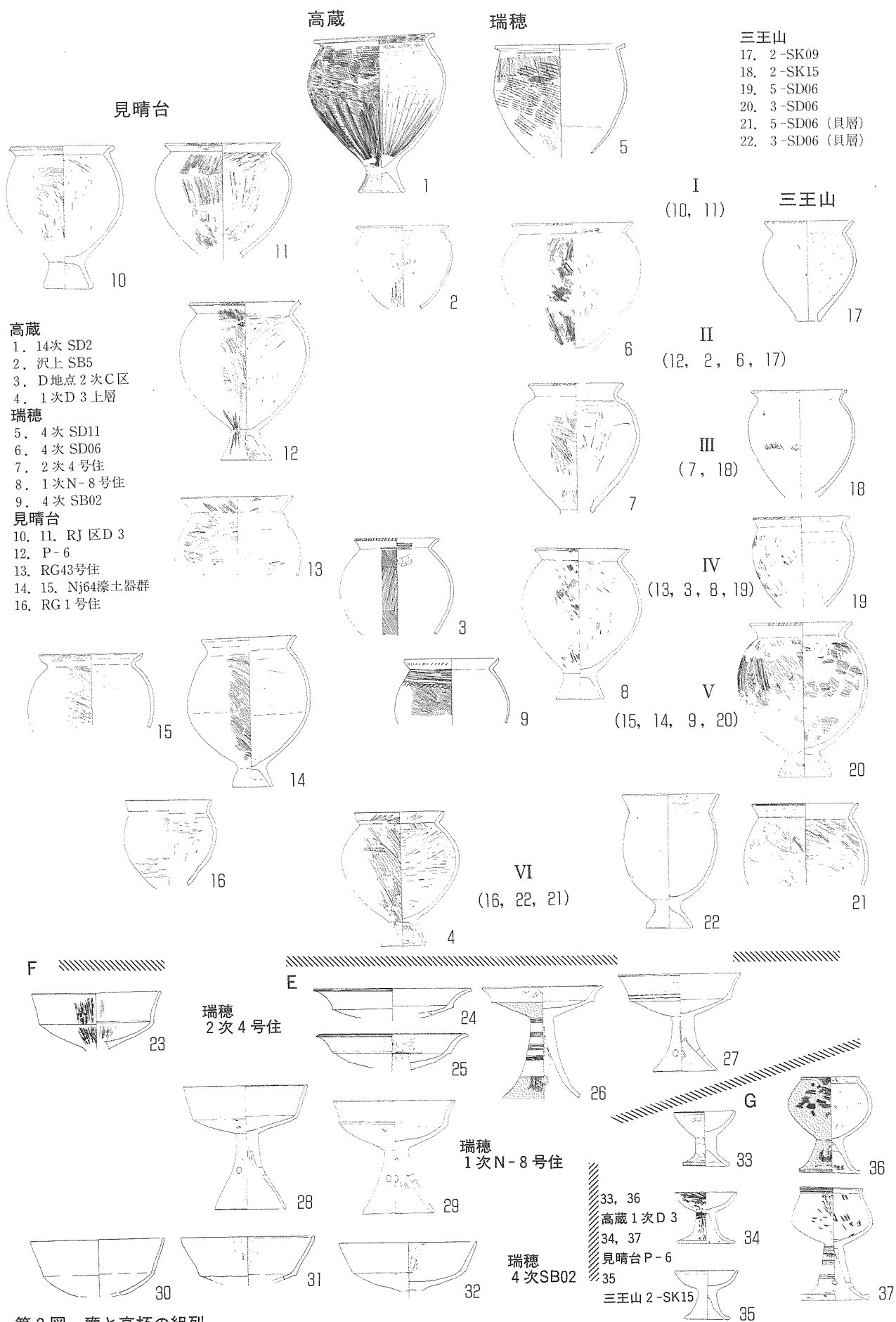
最初に、編年の指標となり得る壺、甕、高杯についてその組列を検討したい。

壺 (第1図)

壺は、資料が充実している高蔵遺跡のものを全体の形と口縁端部の作り等から配列した。横方向には同一遺構から出土したものが並ぶようにした。確実な組列と言えるのは壺Bであり、これは頸部から口縁への立ちかたが上方向から横に開くようになる変化であり、口縁端部にしっかり面をなすものから丸くなるという変化である。前者の変化の要因としては、石黒立人氏が前掲文献等で指摘する、頸部を絞ってつくる中期の壺から、粘土接合時点でシャープに屈折させる後期の壺へという作り方の変化と関わるだろう。壺Aについては、胴部に波状文があるものとないもので大きく二分でき、無い物を壺Aa、あるものをAbとする。Aaについては、これが果たして一列であるのかに疑問が残るが、口縁形態が単純に外反するもの(2, 3)から少し折れて平坦面を成すもの(4)、そして明瞭な段をなすもの(5)へという一貫した方向への変化が見られ、これによって組列を考えた。後の便宜のため、遺構出土のものに限定したが、3



第1図 壺の組列



第2図 甕と高杯の組列

と4の間に『弥生式土器集成』^(註9)P1.54の108に示されたものなどを挿入すれば、形態的にはよりスムーズな組列といえるだろう。文様も組列を考えるためには重要な要素であるが、例えば扇形文などが時間の経過の指標となる可能性があるものの、今の時点で確実な方向は見出せていない。

ここで示した組列では、中期末から後期後半までに5ないし6つの形態の変化が見出せ、これが高蔵遺跡での壺の変化を示している点について問題は少ない。しかし、他の遺跡の資料と対比したときにはっきりと時間の指標とできるのは何かを考える必要がある。他の遺跡でも認識可能な変化としては、口縁部の途中に屈折があるものの出現(II)、その屈折が段差になるもの(III)、段が稜となりその上位が湾曲するもの(IV)という口縁形態の変化が挙げられる。文様では、胴部の櫛歯列点か鋸歯文へというのも認識可能である。胴部の最大径を持つ部分が下降し、無花果形になるのは、個体差があり時期の特定には困難が伴う。21に示したのは、見晴台遺跡出土資料であるが、胴部は球形で、最大径の部分はそれほど下がっていない。しかし、大まかな指標としては認めてよいだろう。つまり、壺Aaについては、5個の組列を示したが、2を除く4個については各時期の指標としてよいだろう。壺Bについては、6個の組列があるが、他の資料に適用可能な指標は、口縁端部の面の有無にかぎられ、大きく二分できるに止まる。

Abについては、ほとんど指標が見出せない。図には、高蔵遺跡、瑞穂遺跡、三王山遺跡の例を挙げたが、これらを時間的な細分に利用するのは困難である。

壺については、壺という器種すべてで同一方向の変化をするわけではないらしい。ある形式では時間の経過とともに胴部が下膨れになるのに対し、別の形式は球胴化するといったように、それぞれ独自の変化をしているように見える。

甕(第2図)

甕は形式分類のA、BからCへ変化していく事については、口縁部にしっかりした面を形成するものから丸くおさめるものへという変化であり、多くの器種に認められる山中式から欠山式への変化と一致し、問題ないだろう。第2図では、12と13の間で変化する。AやBの中での形の変化は、図のように考えた。甕については、その性格上遺跡差もあるものと考え、遺跡毎に組列を考えた。(17は甕ではないが。)

胴部の形態は、上位が強く張り、下半が急激にしまるものから、胴部中央が膨らむ形へという変化で組列を考える事ができる。また、前半については、中期の胴下半のタテハケメとの関わりを想定させる胴外面最下位に縦方向に施されるストロークの長いハケメの有無も指標となるようだ。更に、外面にハケメのない、ナデ調整の甕は図には入れなかったが、10、11と共伴し、その存在も時間の指標となるだろう。口縁端部の刺突の有無については、三王山遺跡について述べたように地域差があり、高蔵遺跡では両者が存在する場合もあって、無いものが古いという傾向はあっても、時期差の指標とする事はできない。胴部内面のヘラケズリについても、頸部直下までなされるものから、中位まで、そしてほとんどないものへという大きな変化は認められるものの、時間的細分の指標と為し得るほど各遺跡で共通しているわけではない。また、甕Cの中では、16や22のように、頸部の締まりが弱いものの出現する時期は限られており、時間の指標としてよいだろう。

更に受け口の甕Dについては、名古屋台地の場合、胴部が球形化した甕(14等)と共伴する例が多く、肩の張った7や18などと伴う例はない。後に器種、形式構成を考える際に述べるが、時間の指標となり得る現象であるが、尾張低地部とは時間差があるようだ。

甕の変化は緩慢な上、個体差が大きい事もあるが、細分はこれ以上困難である。遺跡を超えて考えれば、組列の各個体の間に入る形態のものもあるが、それが時期差であるとは言えない。また、一括資料の中でも形態が異なるものがある事も注意しておかねばならない。甕の検討からは次の事が判明した。すなわち、中期末から後期後半の間に、名古屋の各遺跡でほぼ似たような型式変化を遂げる事、そしてその形と、特定の時期にのみ見られる形態があるものの存在から、図のように甕の組成によって、IからVIのまとまり（いわば甕の様式）に区分する事が可能であり、それが編年の指標となり得ることである。

高杯（第2図）

高杯E、Fについては、三王山遺跡の報文中で組列を提示した（第156図）。そこで触れていない、Fの後続について述べる。第156図8以降は、城遺跡の資料のような脚部が直線的で小さくなるものと、高蔵遺跡D3上層のように、内湾する形を保ったまま低くなるものがあるが（第164図）、直線的なものは名古屋台地より東に多い器形であり、その関係は時間差ではなく、地域差を表している可能性が高い。

高杯の場合も、各土器形式の型式組列がそのまま時期差を表しているわけではなく、高杯Fでは、組列の上下関係にあるものが共伴することもある。時間の指標として活用するには、共伴状況を確認しなければならない。住居からの一括資料が豊富な瑞穂遺跡の事例を第2図に示した。瑞穂遺跡では、一括と認めてよい住居が3軒あり、図で横に並んでいる高杯が出土している。高杯E、Fの共伴の仕方は、組列に沿うようには進展しておらず、2次4号住居では、高杯Eの杯部がまだ浅いものと杯部が極めて深くFに近づいたと言えるものが共伴している。N-8号住居では、Eの杯部が深くなっており、確実に型式変化をしている一方で、高杯Fは整った姿を示す。次の4次SB02では、ほぼ高杯Fに限られ、N-8号住居出土品と比べて、杯底部が口径に対して小さくなるというその後一貫して続く変化をしている。瑞穂遺跡の高杯の変化を、三王山遺跡の時期区分に対応させてみると、2次4号住が②の高杯の組成に近く、N-8号は、③のなかでも古いほうであると見た、第156図の3と4が出土した5-SD06の高杯に近い。そして、SB02は③の新しい時期（2-SD02、3-SD06）に近い。瑞穂遺跡の場合、住居の切り合いが激しく、住居の床面一括としているものの中にも別の住居資料が紛れ込む可能性もあり、この事例のみから高杯Fの出現時期を考えるには慎重である必要があるが、4号住居の23が高杯Fの祖形であると認めてよければ、その出現は、単純にEからの型式変化であるとばかりは言えないし、時間の指標として過大に評価する事はできない事を示していよう。

瑞穂遺跡の事例からわかるのは、三王山遺跡の高杯E、Fの組列（第156図）の1・2と3、3と4が共伴する事がある事、4～6も共伴し得るという事である。ちょうど後期前半から後半への変化は高杯が指標となるケースが多いが、時期の比定には個々の高杯の形ではなく、共伴の仕方が重要である事を確認した。なお、三王山遺跡の組列で、6までのものと7・8が共伴する事例（三王山3-SD06では共伴とは言えない）はないため、編年の指標となる。

その他、高杯Gと杯口縁部が直立するブランデーグラス形高杯は、文様、赤彩が不定形なものから整ったものへの変化、Gについては更にその退化という観点で組列が可能であると考えたが、資料数が少なく、確実とは言えない。しかし、後期前半の中でも前半期の細分に際して、数少ない指標である。

さて、ここで幾つかの型式組列を考え、縦方向に並んだものを横につないでいく作業になるが、これは

一括資料によって確かめるほかない。確実に一括として扱える資料は多くないが、同一遺構からの出土品を共伴と認めれば、各形式の組列を総合して、次のような遺構の順序を考える事ができる。複数の土器形式の組列でチェックできれば、遺構毎の順序として確実に言えるだろうが、条件に恵まれず、資料中の一つの土器形式の組列が、資料全体の序列となっている例が多い点は課題として残る。遺跡別に基準資料の序列を示す。

高蔵遺跡D 3

高蔵遺跡（沢上）SB 5

見晴台遺跡P 6（J 4 貝塚）5 層

三王山①

高蔵遺跡 5 次 SD01

瑞穂遺跡 4 次 SD06

高蔵遺跡（夜寒地区）SD04

三王山②

瑞穂遺跡 2 次 4 号住居

瑞穂遺跡 1 次 N 8 号住居

三王山③

瑞穂遺跡 4 次 SB02

見晴台遺跡 RG43号住居

城遺跡環濠下位

三王山④

見晴台遺跡 RG 1 号住居・Nj64土器群

高蔵遺跡D 3 上層

城遺跡環濠上位

さて、基準資料となり得るような遺構の順序が想定できたところで、器種、形式構成、組成の点からこれらを幾つかのまとまりに分かつ事を考えよう。三王山①以降のものは、直口壺A～Cを多く含む場合が多い。また、三王山②以降は、高杯の中心が高杯Eとなる。そして、三王山③のなかにはE、Fが共伴す

本稿での時期		指標と基準資料	赤塚氏の案 (赤塚1990・1992)	石黒氏の案 (石黒1997)	加納氏の案 (加納1991)	三王山遺跡
後 期 前 半	1	甕 I, 壺 A	山中式 1 段階 山中式 2, 3 段階 山中式 4 段階	第六段階 第七段階 第八段階		①
	2	高杯 A～C 壺 Aa I 甕 II		第九段階 第十段階		
	3	高杯 E, F 甕 III		第十一段階		
後 期 後 半	1	高杯 E 消滅 甕 V, 壺 Aa II	山中式 5 段階 廻間 I 式前半	第十二段階 第十三段階	瑞穂期	③
	2	高杯 F の型式 甕 VI	廻間 I 式 2, 3 段階	第十四段階	能田旭期	
	3	高杯 F の型式 瓢壺, 小型器台	廻間 I 式 4 段階 廻間 II 式 1 段階	第十五段階	廻間期	

表 1 編年対照表

る時期と、F中心となる時期がある事が分かった。受け口の甕Dは瑞穂遺跡4次SB02以降に限られる。一方、高杯Gは三王山③以降にはない。三王山③としたものは環濠出土の資料であり、厳密な共伴関係が不明であるため、器種、形式構成がどの時点で変化しているのかがわからない点もあるが、高杯に関しては②と③の境というより、③の中で形式構成の変化があるらしい。三王山③は、報文中では分けなかったが、瑞穂遺跡のN-8住とSB02がその新古に対応する資料である。ちょうどこの両住居時期の時期を境に消えたりあるいは逆に出現する土器形式が多い事は明らかであり、大きな画期と認め、それ以前を後期前半、以降を後期後半と呼ぶ。そして、その内部では、高杯B、Cを欠き、赤彩も定型化しておらず、いわゆる山中式の範疇に入るとは言い難いが、次に継続する壺やブランデーグラス形の高杯を持つ高蔵遺跡D3を前半1（厳密には、その前に「仮称見晴台式」土器群を後期に含め、それらを前半1の前半、高蔵遺跡D3は1の後半ということになるか）とし、甕の形が類似し、高杯Eが増える以前の高蔵遺跡（沢上）SB5から高蔵遺跡（夜寒）SD04までを2、高杯Eが多い瑞穂遺跡2次4号住居からN-8号住居までを3としたい。後半については、高杯Fの共伴状況と連弧文を持つヒサゴ壺や高蔵遺跡D3上層に見られる小型器台の存在を指標として、瑞穂遺跡4次SB02から城遺跡環濠下位までを1、三王山遺跡④の行を2、高蔵遺跡D3上層、城遺跡環濠上位を3としたい。城遺跡の資料は、出土状況から基準資料には含めがたいので参考資料である。各小期の中で細分が更に可能な事については既に述べた点もあるが、上記の基準資料の位置関係は、時間的な前後関係を想定しており、資料の蓄積が進めば更なる細分は可能であると思われる。また、取り上げていない遺跡の資料を含めると、更に細かな前後関係を考える事が可能ではあるが、すべてを前後関係と見てよいのか否か、まだわからない事が多いため、今回はこれ以上細分しない。先学との対象は表に整理した。名古屋台地でこれまでの名称では、後期前半1前半が「仮称見晴台式」、2、3が山中式、後期後半1、2が欠山式、3が欠山式から元屋敷式と言う事になろう。

2 環濠集落の動向

さて、名古屋台地の弥生時代後期の環濠集落の動向を考えるための前提としての土器編年はある程度整った。これに基づいて、環濠集落の動向を考える事にしたい。

環濠集落は弥生時代を通じて一般的に見られる集落の形であり、濠を掘って防御の役割を持たせているからといって、必ずしもその時代が、争いが頻発する、社会の動乱期にあたるとは限らないだろう。しかし、これから問題とする名古屋の後期の場合、遺跡の立地、濠の規模、そして環濠が機能していた時期の短さ等から見て、やはり緊張した社会状況に対応した集落であると考ええる。そうだとすれば、単に環濠集落だけでなく、環濠を持たない集落やいわゆる高地性集落との関わりや近隣地域の環濠集落との関わりが重要になってくる。近年、そうした観点から、名古屋を含む地域の環濠集落等を全国的な動きの中で評価する新しい研究が相次いで発表された^(註9)。しかし、一方で、そうしたスケールの大きな論を支える発掘調査の成果が十分に整理されているかと言えば、不十分の感は否めない。以下では、なおざりにされてきた感のある基礎的事実を提示する事を中心に、名古屋の環濠集落を考えたい。

2-1 環濠集落の動向を考える前に

環濠集落の動向を考える前に、環濠集落について考える上での基礎的な問題について触れておきたい。まず考える必要があるのは、環濠集落成立の時期の特定すなわち、環濠掘削時期の特定の仕方である。名

古屋の遺跡をはじめとして、東海地方では、濠のみが見つかっていて、濠の内外の様子がまったく不明な遺跡が多い。こうした場合、環濠掘削の時期は特定できない。しかし、多くの場合、出土遺物から環濠の掘削時期が推測される。しかし、三王山遺跡の調査でも明らかなように、環濠機能中に濠内に土器が埋まらない時期があったとすると、濠から出土する遺物は濠が埋まり始めた最初を示すのであって、濠の掘削時期は示さない。濠内の最下層から濠機能中のものの可能性が高い土器の破片が出土する事もあるが、濠の掘削とは関わらない、濠掘削以前の土器が混入する事は当然あり得る事で、それを峻別する事は困難である。仮に峻別できたとしても、環濠から出土する遺物は、やはりせいぜい環濠掘削時期の下限を示しているに過ぎず、それを以って環濠掘削時期を決める事は、今後必要とされる正確さを欠いている。

それゆえ、濠の掘削時期は、濠から出土する遺物ではなく、遺構の切り合いや他の遺構との関わりに求めることになる。注9の文献中で、見晴台遺跡の環濠掘削時期を特定する事を試みた丸山竜平氏は、環濠に極めて近接する住居が、環濠とは共存し得ないということなどを根拠として環濠掘削の上限を決定する。何を根拠とするかは遺跡毎に検討しなければならないが、その特定のためにはこうした手続きが必要である。以下では、できるだけ根拠を挙げて濠の掘削時期を確かめたい。

次に、環濠が不要となった時期を決める方法を考えたい。名古屋の環濠集落では、濠の大半が埋まり、明らかに濠としての機能を喪失した時点でもまだ集落が続いている場合が多く、環濠が不要となった時期の特定は難しい。一般的には、環濠から出土する土器をもって時期を決定している。報告でも述べた通り、三王山遺跡でも、最下層とその上位層には土器の出土の仕方に明瞭な違いがあり、濠の掘削から土器が大量に埋まるまでの間に土器が埋まらない時期があったとすれば、その時期が濠の機能中であり、土器が大量に埋まる時期が、濠が機能を変化させた時期であると考えるのは妥当であろう。しかし、大規模な環濠の場合、例えば濠の下層がいくらか埋まったからと言って、集落を守るという機能が消滅するとは思われない。また、中世の研究からは、濠に「ゴミ」を捨てる事は必ずしもその濠が防御の役割を持っていない事を意味しないことが示唆されている^(註10)。であるなら、大量の土器が出土したからといって、その土器の時期に濠が不要となっていたと無条件に考えることはできないだろう。

では、確実に濠が不要となった時期を決める事はできないのだろうか。濠の埋土中に、地山土が流れ込んでいるような堆積をしている事がある。これは、濠の掘削土で築いた土塁を埋め戻したものである。意図的に埋めたか、崩落したかは不明だが、崩落したものを取り除いていない以上、これは確実に濠が不要になった後の事であると判断してよい。この地山土が土塁の痕跡であるかどうかには議論の余地があるが、濠が埋まっている事には違いなく、この地山土の堆積が濠の機能期間の下限である事は認めてよい。この地山土の流入は、濠の最下層にある例はなく、例えば三王山遺跡1—SD04では、ある程度土と土器が埋まった上に観察される。これを根拠とすれば、土器の埋没よりは濠の機能停止を新しく考える事になる。一方、見晴台遺跡や瑞穂遺跡では、最下層の遺物の少ない土の上に地山土の堆積があり、濠機能中から濠が埋まるまでに遺存度の高い土器が埋まる事はない。これらの事例から、濠が不要となった時期は、濠内に遺存度の高い土器が埋まるようになってから、地山土の堆積までというように幅を持たせて考えるしかないが、地山土の堆積がない事例も多いため、遺存度の高い土器の出土をもって濠は機能を変質させたと仮定しておく。但し、濠の遺物が地点毎に時期差がある事は当然考えねばならず、濠の機能停止の時期も、現時点でという制約を受けている。

これだけの前提をもとに、名古屋市内にある6つの環濠集落について、濠の掘削時期、埋没時期を中心に概観する。なお、各遺跡の詳細は、見晴台考古資料館で開催した特別展「よみがえる環濠集落」の展示解説にまとめたので、重複を避けるため、以下の議論に関わる概要を述べるにとどめる。

2-2 名古屋の環濠集落

名古屋市内には、後期の環濠集落と見られるのが6遺跡ある。高蔵、瑞穂、桜田貝塚・貝塚町遺跡、見晴台遺跡、三王山遺跡、城遺跡である。何れも市域南部の台地、あるいは丘陵の先端部分に立地し、弥生時代にあっては海岸線からそれほど遠くない場所であったようだ。

この内、高蔵遺跡、桜田貝塚・貝塚町遺跡、城遺跡では濠の一部が見つかっているのみで、その他の遺構は見つかっていない。前の議論からすると、濠の掘削時期が特定できない遺跡である。城遺跡については述べたが、桜田貝塚・貝塚町遺跡では、後期後半2を中心とする土器が多く出土している。

高蔵遺跡では、濠から出土する遺物の中に明らかに後期前半まで溯る資料があり、量的にも混入とは考えられない。その上位層から、後期後半1の完形の土器群が多く出土している事も合わせて考えれば、後期後半1に濠が埋まるのに先立って、後期前半の内に濠が埋まる時期があったことになる。

さて、これ以外の見晴台遺跡、瑞穂遺跡、三王山遺跡は調査がある程度行われ、集落の評価も少しはできる。三王山遺跡以外の2遺跡について、濠の機能期間と集落の内容について概要を述べる。

瑞穂遺跡（写真1，2参照）

瑞穂遺跡では、二重に巡る巨大な環濠が検出されている。この二重の環濠は、何れも中期末の高蔵式期の方形周溝墓を切って掘られており、環濠掘削の上限を決定する事ができる。そして、この高蔵式期の方形周溝墓の隣に、後期前半2の方形周溝墓らしい直交する方向を示す2条の溝がある。この溝も方形周溝墓であると思われ、高蔵式以来後期前半2までは、この場所が墓域として利用されていた可能性が高い。

方形周溝墓が、同じ地点で連綿と造られる事の多い墓である事を考えると、墓域の連続性とその破壊という観点から、環濠は、直接切り合う周溝墓だけでなく、後期前半2の周溝墓より後出であると考え。

一方、環濠が埋まり始める時期の特定は困難である。瑞穂遺跡では名古屋台地の他の遺跡と異なって、環濠から土器があまり出土しない。集落内部では、後半1までは住居があり、それ以降は遺物もほとんど出土しない。環濠が不要になったのと、集落の放棄がほぼ同時であると考えるのがよいだろう。

集落の内部では、現在まで約50軒の竪穴住居が見つかっている。住居の出土遺物では、2次4号住居が最古で、後半3の中でも古いほうである。濠掘削の上限の前半2よりは後出である。であるから、この集落では、集落がこの場所に営まれるのと濠掘削がほぼ同時である、集落の開始期に濠を掘っていると考えてよいだろう。更に、この住居に後出する1次N-8号住居、後期後半1の4次SB02があり、この時期までは集落が継続していた事は確かである。集落の内部で見つかる遺構はすべて竪穴住居であり、現時点では集落内部の機能分化の様子はないし、遺構から集落内部に階層的な分化があったことも伺えない。ただ、一括資料を出土する住居の多くが焼失住居である点が注意される。

見晴台遺跡

見晴台遺跡では、北側では濠が二重に巡っている事がわかっており、更にそれがすべて同時に掘削されたわけではなく、埋め戻し、再掘削が行われたようで、そのそれぞれの掘削時期の特定にはまだ材料不足の感は否めない。しかし、最初に環濠掘削が意図された時期についてはいくらかの手がかりはある。先に

述べたように、丸山竜平氏は、環濠に極めて近い地点に営まれた住居が、地山土混じりの土で意図的に埋められたような状況であることから、環濠掘削の上限をこの住居の時期におく。また、内側の濠の外側肩部から出土した遺物が、土塁の下層にあったものであるとして、この遺物の時期も濠掘削時期の上限とする。この遺構、遺物の時期は、何れも後期前半2程度とする事ができるものである。住居は直接の切り合いを持つわけではないし、見晴台遺跡では竪穴住居が地山土混じりの土で埋められているのもこの住居に限ったわけではない。土塁想定地点の遺物にしても、実際に土塁にあたる土が残っていたわけではない。であるから、遺構の直接の切り合いよりは根拠としては弱い、一つの有力な意見である。

濠の掘削時期を考える上で、もう一つ重要と思われるのが、集落域で見つっている2基の方形周溝墓である。環濠内の中央やや東よりで、後期初頭、後期前半2位の方形周溝墓が2基見つっている。この内、1次調査P6（飯尾恭之氏が調査したJ4貝塚と同一遺構である）と30次調査のSD05からなる周溝墓について検討する。この遺構を調査した飯尾氏によれば、この遺構の最下層からは氏が「寄道Ⅰ式」と呼ぶ^(註11)、本稿の中期末から後期前半1に近い時期の遺物が出土するという。しかし、これらの遺物は小片のものが多く、この遺構に伴うものか判然としない。その上位の4、5層の貝層からは、遺存度が高い土器が出土している。この土器については、方形周溝墓に供えられた土器と考える事に問題なく、私はこの4ないし5層から出土する遺物がこの周溝墓の築かれた時期を示すと考えている。そして、その時期は、前半2でも古い時期であろう。そして、環濠内に、方形周溝墓が営まれる例が少ない事と、これに続く周溝墓がまだ見つっていない事から、環濠掘削の上限を決定するものである可能性が高いと考える。丸山氏が述べる竪穴住居と、方形周溝墓からの判断としては、見晴台遺跡で最初の環濠が掘削された時期の上限は後期前半2としてよいと考える^(註12)。

濠が埋まっていく時期についても一様ではない。ここ数年の内に行った北部の調査では、二重の内側の濠には、後期前半の土器のみが出土する地点があることが知られた。遺物は小片であり、かつ小面積の調査であるから、果たして本当に後期前半の遺物のみかどうか明らかではないが、この濠を切る形で新たな濠が掘削され、この新たな濠の下層からは後半1を中心とする遺物が出土する。とすれば、後期前半の内に、一部の濠を埋め、別の濠を再掘削した事は十分想定してよい。見晴台遺跡では、複数次に及ぶ再掘削の可能性が示唆されており、最終的に濠自体が不要となった時期は決めがたいが、新たに掘削された濠からも下層で後期後半1の遺物が出土しているから、この時期に埋まり始めたと考える。濠の他の部分からの出土遺物は、遺存度の高いものは後期後半1以降に限られており、北部での想定と矛盾しない。

以上まで、名古屋の環濠集落の状況を述べたが、以下で議論するために、幾つかの点をまとめておく。

- 濠の掘削時期がある程度特定できる遺跡では、何れも後期前半2を上限としている事。
- 環濠集落の成立に際しては、それまでの集落を単純に濠で囲むわけではない事。
- 環濠集落の内部には顕著な集落機能の分化は見られない事。
- 濠の埋没開始（瑞穂遺跡の場合は集落廃絶）の時期は、高蔵遺跡を別にすれば、おそらくは微妙な時期差を持ちながらも、後期前半3から後半1のなかにある事。
- 瑞穂遺跡を除く遺跡では、濠の埋没が集落の廃絶とはならない事。

最初に、濠の掘削時期が遺構から特定できる瑞穂、見晴台、三王山の各遺跡では、何れも濠が二重に巡っているため、すべての濠が一時期に掘削されたとする保証はないが、少なくともこの内の一部の濠が掘削

された時期の上限として後期前半2という時期を与える事ができる。濠が機能を変化させ、埋没をはじめた時期が後期前半3の終りから後半1前後であるならば、上限にかなり近い時期に濠を掘ったとみてよいだろう。後期前半2は細分が可能である事は既に述べたが、濠の掘削時期についてはあくまでも上限を示しているだけであり、上限の前後を論じてあまり意味がなく、ここでは後期前半2を確認しておけばよい。そして、その集落の成立に際しては、墓域を含む部分に濠を掘っており、単純に既存の集落を濠で囲んでいるわけではない。見晴台遺跡では、竪穴住居を埋めて濠を掘ったらしい痕跡があり、丸山竜平氏は先住者と濠掘削の主体が異なる可能性を述べる^(註13)。三王山遺跡では、未だ溝として認識可能であった方形周溝墓を埋める形で濠を掘っており、方形周溝墓が世代を超えて連綿と営まれる性格の墓である事を考えると、ここでも濠掘削の主体が別である可能性もあるだろう。しかし、見晴台遺跡では、他の地点でも住居を作るために前の住居を埋めたような様子が観察されるし、周溝墓を壊し、それ以前の墓域の一部を環濠集落内とするのは前記三遺跡で共通の現象である。濠掘削の主体が先住者と異なるかどうかは、何が根拠となるのか私には案がないが、一見先住者を無視するかの様に環濠を掘削しているのは特別な例ではなく、これが別の主体によるものとするのは難しいと考える。むしろ、それ以前に何が営まれていたようにその場に環濠を築かねばならない程度の必要に迫られたと考えたい。

次に集落の内部であるが、こちらも調査の現状に大きな制約を受けるが、見つかるのは何れも竪穴住居ばかりであり、集落内が更に区画されたり、あるいは特殊な遺構が存在する事はない。三王山遺跡で出土した銅鉋は、周溝墓の副葬品の可能性が考えられるが、そうだとすれば、周溝墓を築き得ない人、築き得る人の中でも特異な副葬品を持つ人、持たない人という程度の階層の分化が進んでいた事は当然考えてよいだろうが、集落の様子には顕われていない。遺構として残るものは本当に均質であったのか、そうではなくて分化している様子を把握できないだけなのかを決めるには、更なる調査が必要であるが、これまでの調査成果からは、均質な集落内部という評価が妥当である。

今度は濠が埋まっていく時期を考える。濠のみが見つかった遺跡も合わせて、瑞穂遺跡を除く5つの遺跡の濠から共通して出土するのは後期後半1の土器である。いずれも遺存度が高いもので、濠が機能を変化させたのは、何れの遺跡においても後期後半1を前後する時期である。瑞穂遺跡でも環濠内の最新の住居は後期後半1である。しかし、高蔵遺跡では、後期後半1の遺物が出土する下層に後期前半の遺物のみを出土する層があるし、見晴台遺跡でも、後期前半の遺物のみを出土する場所がある。見晴台遺跡の事例は、一度濠が埋まって、濠が機能していない時期があるというよりは、濠の掘削、埋め立て、付け替えといった一連の行為の中で、後期前半で埋まった濠もある、と理解したほうがよいだろう。一方、高蔵遺跡の場合、掘削時期に関する手がかりはまったくないが、濠内から出土する後期前半の特徴を持つ土器は、土器の形や同一層内に後半の土器をまったく含まない事から見て、他の遺跡と同じ時期である、後期後半まで下げて考える事は困難であり、少なくとも他の遺跡より古い時代に濠に土器が埋まったとする事ができよう。そして、その層の上位からは後期後半1の遺存度の高い土器が出土する。後期前半の土器は、時期が決定しがたいが、その上位の後半1の土器と時間的に連続してはいないようであるから、後期前半と後半に濠が埋まる事が二度あったとする事も可能である。高蔵遺跡については、弥生時代を通じて名古屋台地の中心的集落であった事が推測されるが、或いは他の遺跡とは異なる時期に濠が掘削された環濠集落だったのかもしれない。

鳴海丘陵に近接して営まれた三王山遺跡と城遺跡については、報文で述べたので繰り返さないが、濠に土器が埋まり始める時期に微妙な違いがある。前者では、報文で③とした土器群の細分が果たせなかったため、確定ではないが、それを瑞穂遺跡の資料を用いて、前項で区分できた事を考えれば、おそらく後期前半3の内に土器が埋まり始めている。一方、城遺跡の濠から出土する遺物には後期前半まで溯り得るような遺存度の高い土器はほとんどなく、後半1以降である。

瑞穂遺跡では、集落内に営まれた最新の住居が環濠集落の廃絶の時期を示すと考えるが、それは後期後半1である。

濠が機能を変化させた、あるいは集落自体がなくなった時期は、後期前半3の終り頃から、後期後半1の中にある事は確認できたが、現状ではその中で微妙に時期差がある。これが実態を反映しているとは限らないが、例えば瑞穂遺跡が継続している時点で三王山遺跡の濠が埋まり始めているのはほぼ確実であって、環濠集落の終焉は、かなり近い時期であるとはいうものの、少なくとも土器の1小期分の違いがある事は確かである。この事の意味は今はまだ良くわからないが、伊勢湾沿岸地域の環濠集落を広く見たときに、濠から出土する土器にいくらかの時期差があることは認められ、環濠集落廃絶の時期の近さを強調するだけではなく、そうした微妙な時期差を評価していかなければならないのだろう。

さて、名古屋の環濠集落では、瑞穂遺跡を除いて、環濠が埋まり始めた後も同じ場所で集住して住む形の集落が続いている。濠から後期後半2以降の土器が大量に出土することがそれを示しているし、三王山遺跡や見晴台遺跡では実際に竪穴住居も見つかっている。環濠集落以外では、遺跡も増加し、集落数が増加するようではあるが、環濠集落だった遺跡自体の規模が縮小する事はないようだ。環濠集落の動向とは直接関わらないが、環濠から出土する土器を見る限り、高蔵遺跡と城遺跡が後期後半3まで、三王山遺跡は後期後半2まで、桜田貝塚・貝塚町遺跡もほぼ同じ頃まで、見晴台遺跡は評価が難しいが、後期後半3以降の古墳時代まで遺物が出土しつづけ、集落としては継続しているようである。環濠の第一の機能が先に想定した通り防御であるならば、環濠が埋没した事は防御が薄くなったことを示し、濠を必要とした社会状況がなくなったことを意味していよう。それにも関わらず集落の動向に大きな画期は見られない。争乱の終結は、それまでの秩序を激変させる事はなかったらしい。環濠集落は、それまでにはない規模の集住を実現したが、それは単に社会の緊張状態に備えたものだけではないのだろう。

2-3 小結

名古屋の環濠集落の動向を検討した結果、根拠を示せる遺跡については、後期前半2を上限とし、おそらく2から3の内に濠を掘削した事が確認できた。そして、そのほとんどが、後期前半3から後半1の内に濠の機能を変化させている。そして、まさに濠が機能していた同じ時期の周辺地域を見てみると、知多半島の丘陵上には報告で述べたような高地性集落が現われている。そして、他地域に目を移しても、環濠掘削時期は特定できないものの、環濠から出土する遺物が名古屋の環濠集落と同時期で、少なくとも濠が機能していた時期の一部が共通する環濠集落が多数ある事もはや周知の事実である。これらの事実は、単に名古屋の遺跡だけでなく、伊勢湾沿岸一帯が緊張状態にあったことを示していよう。そして、その緊迫した状況とは、『魏志』に「倭国乱」と記されたものであるらしい事も確かになりつつある^(註14)。その中で占める名古屋の環濠集落の位置、例えば、名古屋の環濠集落は伊勢湾沿岸のその他の環濠集落とともに一体であったのか否かという点が重要になるかと思うし、名古屋の環濠集落の終焉時期が微妙に異なる事

から、それらをすべて一連のものと判断してよいかという問題も生じてこよう。武器類の出土が少なく、濠に囲まれていながらも「平和」^(註15)的な印象を与える名古屋の環濠集落の中で、極めて大規模な二条の環濠に囲まれ、武器であろう銅鏃の出土が多く、焼失住居もあるなど(写真1, 2参照)、突出した印象を与える瑞穂遺跡の動向も興味深い。しかし、それについて論じる事は、基礎的な事実を確定しようという本稿の趣旨から外れるし、本稿中で紹介した先学の推論を超えるための新たな事実もない。環濠集落の評価は今後待つ事にして、最後に、本稿で取り扱った土器の変化と環濠集落の動向を関連付けるよう試みて、名古屋台地の弥生時代後期についてのまとめとしたい。

3 弥生時代後期の名古屋

今回報告した三王山遺跡の調査では、環濠集落期と環濠埋没期の土器がいずれも多く出土したが、伊勢湾沿岸地域が独自の土器様式(従来の欠山式)を発達させると言われる環濠埋没期の資料の中に、手焙形土器や台付直口壺のように、西日本地域との関わりなしには考えられない土器群が見られた。また、同じく西方の地域との関わりなしには成立し得ない受け口の甕Dも環濠内からしか出土しない。いわば、従来、環濠埋没期以降は独自の土器様式を発達させると言われていたのに対して、むしろ環濠埋没期に一気に西方諸地域からの影響が顕在化したように見える。城遺跡の環濠から、手焙形土器や近江地方の特徴を持つ受け口、平底の甕が出土しているのも示唆的である。もちろん、土器の大多数はいわゆる欠山式の土器群であり、環濠機能時の後期前半(山中式)の土器群と比べると西日本との関わりが少ない土器ではある。しかし、山中式の成立に関して西日本諸地域からの影響はあったとしても、その後半期、後期前半3の時期には、三王山遺跡では、直接西日本と関わるような土器はほとんど見当たらない。

尾張低地では、手焙形土器や受け口の甕は、赤塚氏の言う山中式後期に現われ、そのことから赤塚氏は、「新たな形式、形態を模作(ママ)する混沌とした製作環境」を想定し、これが、社会的に大きな変動、混乱を予見するものである可能性を述べる。土器の変化と環濠集落の動向が関わるとすれば、この変化が重要であると思われるが、名古屋台地では三王山遺跡以外でも、例えば甕Dは、後期後半1の指標としたように、これを含む資料と含まない資料は明確に分かれ、赤塚氏のいう山中式5段階を待たねば出現しない。手焙形土器の出現も、現在の資料では後期後半1以降である。いわば、名古屋台地では、尾張低地部と比べると、ちょうど環濠が機能していた期間の分だけ、西日本からの新たな情報が遅れているような印象を与えている。

ところで、今まで西日本諸地域の関わりと述べてきたが、例えば甕Dが、既に台付甕として確立した形で入ってきている事を考えると、直接西日本との関わりというよりは、尾張低地を介した関わりを想定した方がよいだろう。そうすると、今述べた土器と環濠集落の関わりからは、次のような想定が成り立つかもしれない。すなわち、環濠機能中は、尾張低地部とは少なくとも土器に関しては没交渉であり、環濠埋没後にそれが急激に名古屋台地に流入したとする考えである。果たしてそうだろうか。名古屋台地では、成立の時点では西日本との関わりが強い山中式土器の成立が尾張低地より遅れる可能性が高い事は既に述べたし、後期後半では、西日本的な「薄甕」^(註16)であるS字甕等は名古屋台地にもたらされる事はほとんどない。しかし、では没交渉であったかと言えばそうではない事は、例えば後期初頭の甕の作り方の変化、壺の形式構成の変化はほぼ同時におきている事、環濠集落の前後の時期では高杯の型式変化などはむしろ名

古屋台地のほうが先行しているように見える程近い時期に生じている事から明らかであろう。

つまり、先に見た環濠集落期の現象は、在来のものについては情報をほぼ同時に共有している一方で、西方からの情報は、尾張低地を介してもたらされることが多く、それが尾張低地で定着するまで名古屋台地にもたらされる事はないという、名古屋台地の特徴を示していると考えのほうがよいのだろう。後期後半については、伊勢湾沿岸地域全体で、西日本からの目にみえる影響は乏しいが、その中で、西日本各地で「薄甕」が生まれるのとほぼ同時に発生するS字状口縁台付甕が、尾張低地に程近い名古屋台地ではまったくみられない事も、西日本との関わりの薄さを示していよう。ただ、S字甕については、単に影響、情報の有無が土器の有無となって表れているわけではなく、S字甕を必要とする社会の状況の有無が原因であると考えが^(註17)、いずれにせよ尾張低地部に比べると西日本各地と連動した動きが少ない事は否めない。そして、そうした名古屋台地と尾張低地部との関わりは、少なくとも弥生時代後期を通じて変わる事がなかったようである。

ところで、こうした尾張低地部を伊勢湾沿岸の中心とみなすような考え方からは、次のような意見も生まれる。名古屋台地では遅れると述べた山中式の成立は、周辺のその他の地域でも遅れているのだが、奈良康正氏は、山中式の広がりには時間差があるのは、「土器様式を共有することによって形成される同盟関係の中における地位の反映であり、編入の遅速により、その地域が尾張地方において重視されていたか否かが諮れるのではなかろうか」と述べる^(註18)。しかし、山中式土器の共有が「同盟関係」を示すという根拠もないし、各地に山中式土器が成立するのが尾張地方の意図のものとなされたとする根拠もない。各地の「山中式」は、この時期に新たに出現するものだけ見ても、濃尾低地が「組み込」んだと言い得るほど斉一的ではないし、現状で、「山中式」の特徴をもつ土器の出現に地域毎に時期差があっても、その遅れている時期の別の土器がわからない以上、そのまま実態を示していると見る事はできない。

名古屋台地に関して言えば、山中式は、尾張低地部での確立なくして有り得ない、つまり名古屋台地の諸集落が、独自に山中式土器を成立させることは考え難く、尾張低地からの波及という事を考えざるを得ないが、それはこの時代には西日本からの情報が尾張低地を経由してもたらされる事が多い名古屋台地の特質であって、在来の土器についてみれば、情報の流れは必ずしも尾張低地から名古屋台地へという方向ばかりとは言えないことはすでに述べた通りである。そういう点から見れば、名古屋台地で山中式の成立が遅れるのは、尾張低地の集団の意図ではなくて、尾張低地の中でも山中式が確立していなかった事によるのだろう。

土器からこうした想定をすれば、名古屋台地の環濠集落成立が、尾張の拠点集落朝日遺跡の後期二度目の環濠掘削と近い時期であることがより重要になろう^(註19)。西日本でまず生じたであろう争いを、尾張低地経由で知った名古屋の諸集落も、それに対応すべく環濠を掘削したのでだろう。先に述べたように、高地性集落なども伴い、実際の争いもいくらかはあったのだろうが、内部から武器の出土も少なく、「平和裡」の内に築かれたと解釈する余地もありながら、巨大な環濠を掘削したところに名古屋の環濠集落の特徴が表れているのかもしれない。そして、環濠集落を生み出した争乱に対するそうした関わり方、つまり、直接の当事者ではないということが、環濠埋没後も集落構成に大きな変化がなく、同じ形態の集落を営む背景となっているのであろう^(註20)。



写真1 瑞穂遺跡環濠



写真2 瑞穂遺跡焼失住居

(注1) 各遺跡の報告については、ここでまとめて掲載しておく。すべてを挙げるべきであるが、紙幅の都合で概報などの多くを割愛し、一部を挙げるにとどめる。また、遺跡の報告の内、三王山遺跡のまとめで触れたものについても割愛させて頂く。

高蔵遺跡

荒木実他『高蔵遺跡五本松町発掘調査概要報告書』財団法人荒木集成館 1986

荒木実他『高蔵遺跡五本松町第2, 3次発掘調査概要報告書』財団法人荒木集成館 1987

荒木実他『高蔵遺跡五本松町11第4, 5, 6, 7次発掘調査報告書』財団法人荒木集成館 1991

荒木実他『高蔵遺跡沢上二丁目501発掘調査報告書』財団法人荒木集成館 1989

重松和男『熱田区夜寒町・高蔵遺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XX 名古屋市教育委員会 1987

名古屋市教育委員会『熱田区高蔵町高蔵遺跡発掘調査概要報告書』1982

竹内宇哲『高蔵遺跡第4次調査の概要』名古屋市教育委員会 1990

野口泰子『高蔵遺跡第5次発掘調査の概要』名古屋市教育委員会 1994

田原和美編『埋蔵文化財調査報告書』26 名古屋市文化財調査報告34 名古屋市教育委員会 1997

瑞穂遺跡

名古屋市教育委員会『瑞穂区瑞穂遺跡』『瑞穂遺跡・桜台高校遺跡発掘調査』 1979

名古屋市見晴台考古資料館『瑞穂区牧町瑞穂遺跡発掘調査概要報告書』 1982

服部哲也『瑞穂遺跡 第4次調査の概要』名古屋市教育委員会 1987

桜田貝塚・貝塚町遺跡

岡本俊朗『「桜田貝塚」の復元的再整理』『年報』I 名古屋市見晴台考古資料館 1980

見晴台遺跡

伊藤厚史・野口泰子『見晴台遺跡発掘調査報告書—遺構編—』名古屋市見晴台考古資料館 1993

伊藤正人『見晴台遺跡第32次・第33次発掘調査の記録』名古屋市見晴台考古資料館 1996

見晴台遺跡については、丸山竜平「続・魏志倭人伝にみる「倭国大乱」と考古学—名古屋市見晴台遺跡の環濠集落めぐって(上)—」『東海学園国語国文』第四十九号 1996も参考にさせて頂いた。

(注2) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』XLVII 1968

(注3) 赤塚次郎「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集 1992

赤塚次郎「瑞龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』第1集 1992

(注4) 大参義一「弥生式土器・土師器」 名古屋市見晴台考古資料館『館蔵品図録』I 1980

(注5) 石黒立人「尾張地方における弥生時代後期の土器編年」『第5回春日井シンポジウム資料集』 1997

(注6) 宮腰健司「VII期以降の問題点」『朝日遺跡』V(土器編・総論編)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 1994
宮腰健司「朝日遺跡における弥生時代後期方形周溝墓の変遷」『年報』平成9年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター

1998

(注7) 名古屋市博物館『吉田富夫コレクション』1982

名古屋市教育委員会『清水寺遺跡発掘調査概要報告書』 1976

(注8) 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編 1989再版

(注9) 犬塚康博『戸山屋敷銅鐸考』名古屋市博物館 1992

加藤安信「伊勢湾地域の弥生時代後期社会」『伊勢湾と古代の東海』古代王権と交流4 1996

加藤安信「弥生時代」『新修名古屋市史』第一巻 1997

丸山竜平「名古屋市見晴台遺跡環濠年代考」『立命館大学考古学論集』I 1997

(注10) 千田嘉博「弥生の戦いと中世の戦い」『倭国亂る』国立歴史民俗博物館編 1996

(注11) 飯尾恭之「尾張における後期弥生式土器の編年的研究(I)」『古代人』27・28 名古屋考古学会 1973

(注12) 関東では環濠内に環濠集落期の方形周溝墓が築かれる例があることが下記文献で紹介されており、方形周溝墓の存在だけでは環濠掘削時期特定の確実な根拠とは言えない。名古屋台地でも、報文で述べた三王山遺跡の2-SD08がその可能性がある。

大塚初重ほか『弥生時代の考古学』シンポジウム日本の考古学3 学生社 1998 P.92-93

(注13) 前掲注9 丸山氏の論文。

(注14) 加藤安信氏のように異論を唱える研究者もある。前掲注9

(注15) 前掲注9 加藤氏の論文。

(注16) 石野博信「古墳前期の薄甕と厚甕」『網干善教先生華甲記念考古学論集』 1988

(注17) 村木誠「甕の意味を問う—美濃の事例研究—」『美濃の考古学』第2号 1997

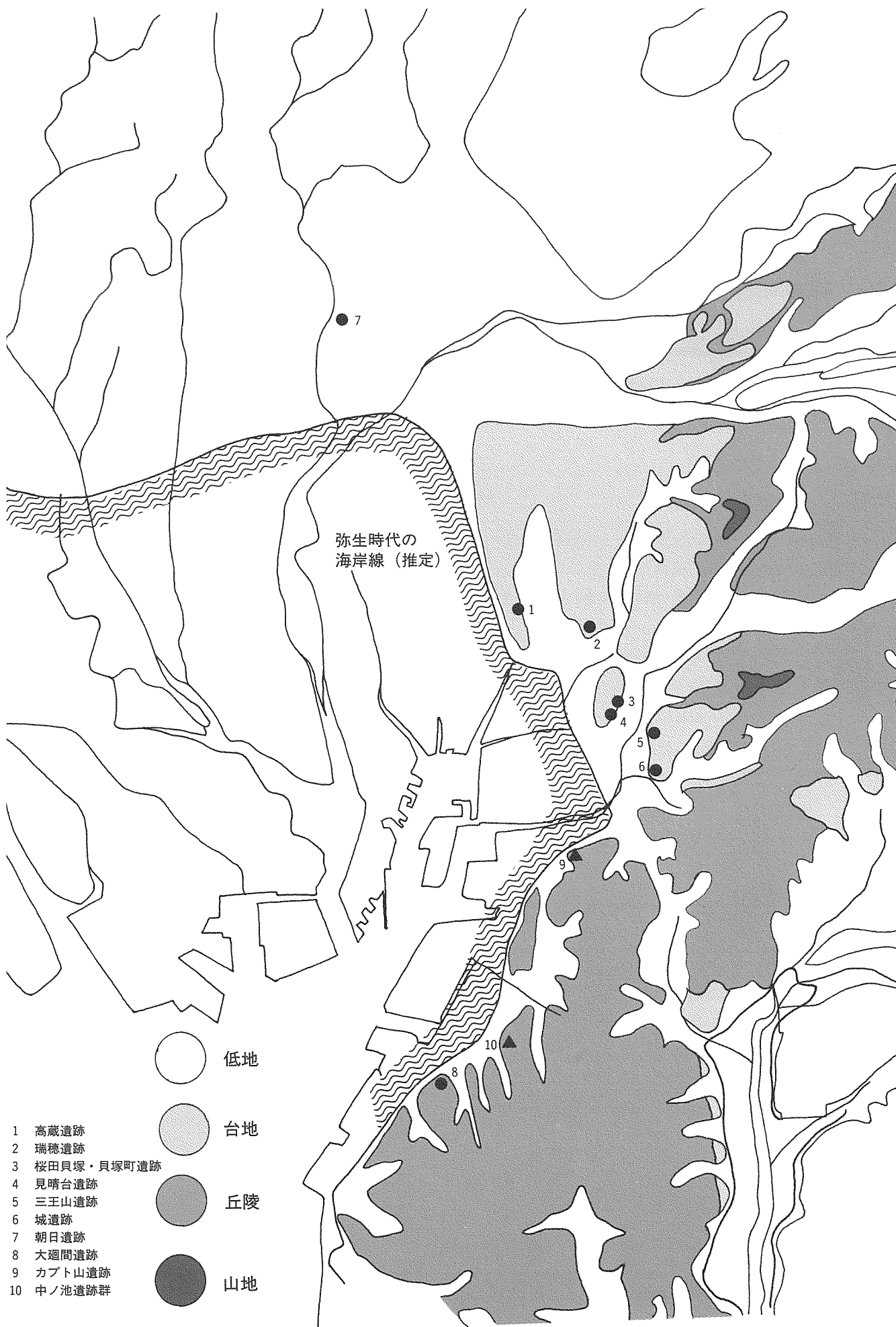
(注18) 奈良康正「弥生時代後期における伊勢湾沿岸地域の一様相」『京都府埋蔵文化財論集』第3集1996

(注19) 石黒立人「朝日遺跡のイメージ」『朝日遺跡』V(土器編・総論編)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集 1994

(注20) 本稿執筆中に、見晴台考古資料館で特別展「よみがえる環濠集落」を開催した。その際多くの方々にご協力頂きました。また、関連事業として御講演をして頂いた森岡秀人氏には多くのご教示を頂きました。更に、石黒立人氏には、高蔵遺跡D3等、後期初頭の土器について多くを教えて頂いた。赤塚次郎氏・加納俊介氏・丸山竜平氏には日頃から様々な御教示を頂いています。小島一夫氏からは、名古屋の環濠集落の性格について、示唆に富んだ話をお聞きしました。有り難うございました。

表1の赤塚1990は、「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990

加納1991は、「土師器の編年 東海」『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991



第3図 関連遺跡地図 (木村有作『あゆみ渇の考古学』1994に加筆)